

物語の冒頭をめぐって

曾 田 文 雄

「物語」の冒頭には、およそ8通りの様式がある。

昔 今は昔 これらを欠くもの

これらを取上げ、語自体の意味よりは寧ろ、それらが夫々の作品に、どうして選ばれるに至ったのか、という点あたりから話を進めてみたい。

奈良時代における伝説歌謡の題詞、伝承説話の多くは、冒頭を「昔」で始める。これを承け、平安時代も、「昔」で語り起されれば、聞き手乃至読者は、直ちに何か遠い過去にあった、所謂「昔語り」が語り出される、との心構えを持つ。「伊勢物語」の「昔、男ありけり」など、それをふまえた書きぶりである。

この作品の成立、発展の様を辿れば、名の知られぬ昔男の、歌にまつわる名誉を語るものから、「色好み業平」へと展開していったことが明らかにできる。

「今は昔」の場合、「竹取物語」にみる如く、「今は昔……とぞいひ伝へたる」なる形を構成として持つ。これは、話全体をすっぽり包み込んで、作者以外の口から伝えられたもの、という形式で、作者の文責を転嫁せんとする隠れ蓑の役を果す。作者は、気軽に語り得るわけである。「昔、男」の場合でも、特定人物に繋がるイメージさえ無ければ、右の安全弁など不要。故に、事実をふまえぬ創作による場合ならば、「昔」で十分というわけである。「宇津保物語」がこの語を採用できたのは、その理由あつてのことであつた。

「大和物語」は、屢々実名を掲げる。そこには、「昔」の入り込む余地などない。ここに吾々は、歌物語の変貌をみることができる。

「平中物語」という作品がある。一般に、これは歌物語、と承知されている。確かに、どの段も歌を含み、また、歌についての功名をさえ語る。しかし、第一段は「今は昔」に始まり、且つ歌に続いては、「……といふ。」なる形をとる。かの「原伊勢物語」では、「……とよむ。」であつたのが、付加部分に入るや「……といふ」形式に転ずることと照しても、「伊勢物語」に対して抱く、歌物語としてのイメージを、「平中物語」にもその儘当嵌めることには、いささかのためらいが感じられることではある。

この「平中物語」は、右に引いた「今は昔」に続く文が、

男二人して女一人をよばひけり。

なる叙述であるという点から推していけば、かえって「説話」の方に重点が置かれている、と考えるのがよくはあるまいか。他に傍証も挙げ得るが、ともあれ、この作品については、それを情的に眺めるか、あるいは知的なものとして汲み取るか、という鑑賞態度が改めて問われることとなってこよう。